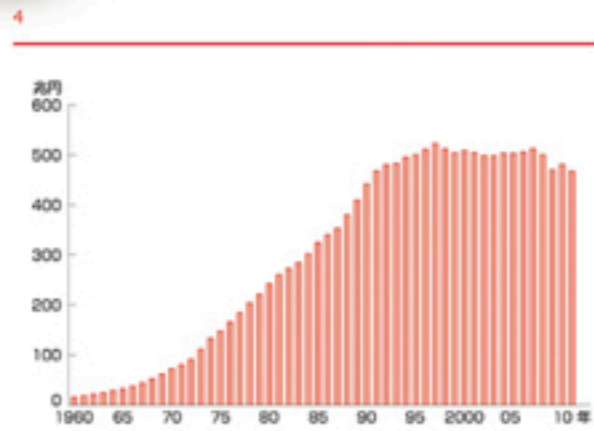


リーマンショック、欧州経済危機、財政赤字など現実の経済に即した解説を通して学ぶ経済の文法、10年ぶりの改訂。

特徴 1

数式をほとんど使わず、具体的事例を多用しながらやさしい文体で解説。経済学を身近に感じることができて、初心者にもたやすく理解できる。



出所：内閣府経済社会総合研究所
図0-1 日本の名目GDP額の推移(1960～2011年)

ています。これはデフレで物価が下がっているという面がありますが、高齢化と少子化で今後さらに日本の規模が小さくなっていくのではないのか、という懸念を多くの人々が持っています。本当にそうなのか、もしそうならそれに対してどのような対応が必要なのか、そうした問題に答えるのも、この本の重要な役割であると考えています。

図0-1は、GDPの動きそのものを追ったものです。1960年代から現在に至るまで、日本経済の規模は1990年まではほぼ一貫して順調に拡大しています。しかし90年代あたりから成長の伸びは急速に衰え、1990年代から2010年の20年間は経済の停滞が目立っています。経済規模の変化を見るには、GDPの数字を

4-1 名目GDPと実質GDP 図0-1のグラフはGDPの動きをそのままの形で示したものです。図0-2はそうではありません。名目GDPは生業されたものの金額をそのときの物価で評価したものです。物価が上がっていき、それだけで名目GDPは膨らんでいってしまいます。図0-1の名目GDPの動きは生業の増加も物価の増加も含んだGDP全体の動きを示してあります。これに対して、実質GDPの成長率である図0-2は、図0-1の名目GDPの動きを物価の上昇分を取り除いた実質的な部分であると考えてください。これを実質GDPといいます。図0-2はその成長率(変化率)を示したものです。ここではこの点にわけて立ち入るとむずかしくなりますので、くわしくはつぎの章を参照してください。

特徴 2

3色刷の見やすい図版。



出所：内閣府経済社会総合研究所
図0-2 実質GDPの成長率(1960～2011年)

そのまま見るより、その変化を見たほうがよいでしょう。

図0-2はGDPが前の年に比べて何パーセント上昇したのかを示したものです。注4でも述べたように、図0-2では、GDPの伸びのうち物価上昇による部分は除いてあります。図0-2に示されたGDPの成長率のことを、通常、経済成長率といいます。経済成長率の数字を見ることで、景気の状況がよくわかります。

図0-2を見ると、1960年代には、日本の経済成長率がたいへん高かったことが読み取れます。この時代、日本は戦後の高度経済成長期にあり、東洋の奇跡ともいわれる急成長をつづけていました。1955年には世界の2%程度しかなかった日本経済の規模が、2001年には15%を超える規模になったのは、この時期の高度成長のおかげです。

1970年代には、73年と79年の2度にわたって、国際的な石油価格が高騰する石油ショックが起こりました。石油を海外からの輸入に全面的に依存する日本経済はこれによってたいへん大きな打撃を受けました。とくに79年に起きた第一次石油ショックは日本経済に大きな被害をもたらし、図0-2からも読み取

特徴 3

マクロ経済学学習に必要な重要事項を網羅。

1 マクロ経済学のとらえ方 27

Guide to Current Topics

GDPの計測と利用

GDPは経済活動の動きをとらえるもっとも基本的な指標です。日本では内閣府(かつての経済企画庁)がその計測を行い、四半期ごとに速報値を出します。

この速報値は景気の状況を表す重要な指標で、その動きは注目されています。マスコミはGDPの速報値を大きく報道し、その動きによって景気を判断しようとする。政府もこの数値を用いて景気見通しなどを行ないます。

ただ、GDPの速報値は、かならずしも正確な指標ではありません。時期的制約のなかで出される速報値ですので、後から大きく修正されることが少なくありません。多少不正確でも、早くGDPの速報値を出すほうがよいという判断があるのでしょう。

各国のGDPやそれを人口で割った一人当たりのGDPは、その国の経済力を測る指標として使われます。一人当たりのGDPが1万ドルを超える国は先進国、1000ドル以下の国は、経済的に貧しい国であると考えられます。

もっとも、GDPや一人当たりのGDPを単純に比べて経済力を測るには問題があります。たとえば日本と中国の一人当たりのGDPを比べて日本のほうが中国の何割になっていると計算しても、それはあまり意味がありません。それは中国のほうが日本よりもはるかに物価が安いことから、同じ所得でも購買できる商品の量が違うからです。一般的に経済発展の遅れている国は一人当たりのGDPは小さいのですが、同時に物価も安いので、GDP指標で見られるほどの生活水準の格差はありません。

GDPはフローの指標です。それはあくまで1年間に行われた生産、あるいは1年間に生み出された所得の額であって、過去から残されているストックを含んでいません。ヨーロッパ諸国にはフローとしてのGDPは小さくても、過去から多くの社会資本を蓄積しているため、人々の生活の質はかかなり高い国もあります。豊富な社会資本から生み出されるものは、必ずしもGDPのなかに含まれていないようです。

特徴 4

2種類のコラム
《Guide to Current Topics》
《経済学ステップアップ》
収録。

特徴 5

章末演習問題付き。解答・解説が充実しているので試験対策として最適。

■マクロ経済学 目次■

0 マクロ経済学とはどういう学問か

Part 1 マクロ経済学の基礎

- 1 マクロ経済学のとらえ方
- 2 マクロ経済における需要と供給
- 3 有効需要と乗数メカニズム
- 4 貨幣の機能と信用創造
- 5 貨幣需要と利子率
- 6 財政政策の基本的構造
- 7 財政・金融政策とマクロ経済
- 8 総需要と総供給

Part 2 マクロ経済学の応用

- 9 労働市場の機能と失業問題
- 10 インフレーションとデフレーション
- 11 財政破綻と財政健全化
- 12 金融政策と金融システム
- 13 国際金融市場と為替レート
- 14 通貨制度とマクロ経済政策
- 15 経済成長と経済発展

菊判 400頁
予価2940円
(税込)
12月中旬刊